

センター研究報告会2010

——講演と指定討論

吉川左紀子 (こころの未来研究センター長)
Sakiko Yoshikawa

船橋新太郎 (同教授)
Shintaro Funahashi

鎌田東二 (同教授)
Toji Kamata

カール・ベッカー (同教授)
Carl Becker

河合俊雄 (同教授)
Toshio Kawai

内田由紀子 (同助教)
Yukiko Uchida

島菌 進 (東京大学大学院人文社会系研究科教授)
Susumu Shimazono

菅原和孝 (京都大学大学院人間・環境学研究科教授)
Kazutaka Sugawara

高橋英彦 (京都大学大学院医学研究科講師)
Hidehiko Takahashi

はじめに

吉川左紀子

2010年12月18日、2010年度のセンター研究報告会を行った。ここでは、研究報告会の5つの講演の概要と、指定討論の先生がたのコメントを掲載する。研究報告会では、今年度からセンターで取り組んでいる6つの研究テーマのうち、「こころ観」「現代の生き方」を取り上げた。あとの4つ、「きずな形成」「負の感情」「発達障害」「自然とからだ」については、次年度以後の報告会で順に取り上げてゆく予定である。

報告会の午前中のセッションは「こころ観」領域の2つの講演とディスカッションで、サルメタ認知能力に関する神経生理学的アプローチについて船橋新太郎教授が、また、日本の宗教史という観点から日本人のこころ観の変遷について鎌田東二教授が講演した。指定討論をお願いしたのは、島菌進先生(宗教学)と菅原和孝先生(文化人類学)である。

連携研究プロジェクトの研究を紹介するポスターセッションをはじめ、午後のセッションは「現代の生き方」領域の3つの講演とディスカッションであった。看護師のストレスと対処能力に関してカール・ベッカー教授が、発達障害者の心性に関

して、自己意識という観点から臨床心理学の河合俊雄教授が、ひきこもりやニートの存在に象徴される日本の若者の適応感に関して文化心理学の内田由紀子助教が講演した。指定討論は、高橋英彦先生(精神医学・認知神経科学)と、島菌進先生にお願いした。

センターでは、研究プロジェクトの構成から情報発信の仕方まで、「異分野の考えかたが出会うこと」「多様なものから発想を組み立てること」を重視している。研究報告会のプログラムもそうした考え方を反映しており、各セッションに異なる専門分野の講演を入れ、指定討論の先生がたにも、ご自身の専門とは異なる講演に対するコメントをお願いした。報告会が終わった後の懇親会でも、他大学から参加した研究者や大学院生から、「神経生理学と宗教学の話が同時に聞けるとは思わなかった」「指定討論の先生からどんなコメントが聞けるのか、とわくわくした」といった感想をいただいた。通常の研究報告会の「常識」とは異なるやり方であるが、報告会の参加者にとっては大変スリリングで聞きごたえのあるディスカッションが展開し、「討論の時間が短かったのが残念だった」という声も多かった。報告会でのディスカッションを今後の

研究プロジェクトの中に活かしてゆくことが、センターの研究者の課題である。

最後に、拡散しがちな議論や視点を的確に整理し、鋭いコメントや問いかけをしてくださった指定討論の先生がたに、心からお礼を申し上げます。

「こころ観」領域 研究報告

メタ認知機能からこころを 考える

船橋新太郎

私たちは、いま何をしようとしているのか、何を知っていて何を知らないのか、何が得意で何が不得意か、何を考えているのかなど、いまの自分の「こころ」の状態を知ることができ、それに基づいて行動を組み立てている。自分自身のこころの状態をモニターする働きや、自身が記憶している内容やそれを思い出せるかどうかなど、記憶状態をモニターする働きを総称して「メタ認知」と呼んでいる。メタ認知機能は自分の「こころ」の状態を認知する仕組みであり、これに直接関わる脳の仕組みを明らかにすることにより、人の「こころ」を理解する手がかりが得られると考えられる。

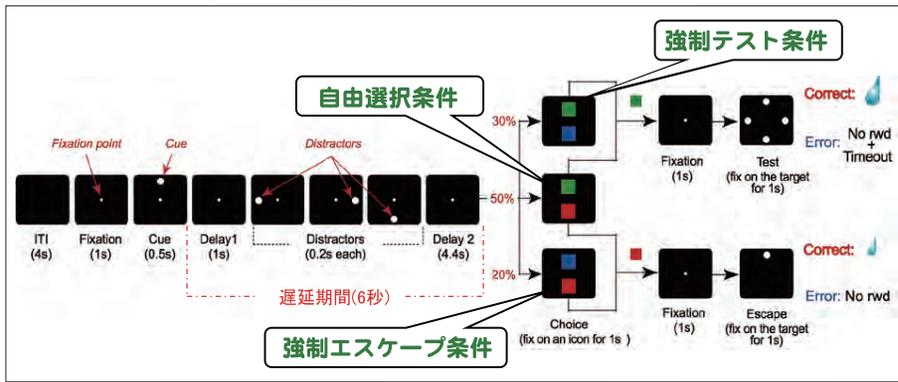


図1 選択条件つき遅延位置あわせ課題

こころの状態をモニターできるかどうかは、言語による内観報告に基づいて検討されている。この働きの有無の判断には言語による内観報告以外に方法がないことから、メタ認知の研究は言語によるコミュニケーションが可能な、人でのみ可能であると考えられてきた。

人では、feeling-of-knowing judgment 課題がメタ認知研究でよく用いられる。この課題では、実験協力者に記憶テストを行わせ、答えがわからない場合、「知ってる感じ」の強さを問う。たとえば、「栃木県の県庁所在地はどこか？」と問われると、「知ってるけど、今はちょっと思い出せない」と、強い「知ってる感じ」を示すかもしれない。また、「山下三郎の誕生日はいつ？」と問われれば、「まったく知らない」と、「知ってる感じ」がまったくないことを示すかもしれない。一見すると、自身の記憶状態をモニターできているように思えるが、本当にモニターできているかどうかを確かめるため、直後に多選択肢のテストを行う。もしメタ認知能力を持っているとすると、思い出せなかったが強い「知ってる感じ」のあった問いでは直後のテストで正解する確率が高くなり、「知ってる感じ」の弱い問いでは正解する確率が低くなると予想される。人でこのような検討をすると、予想される結果どおりになることから、人はメタ認知能力を持っていると結論できる。

Feeling-of-knowing judgment 課題を利用して、脳のどの場所がメタ認知に関わっているかが検討されてきた。その結果、前頭葉に損傷のある人では「知ってる感じ」の強さと直後の記憶テストの正答率とのあいだの相関が低いこと、脳機能イメージングにより、「知ってる感じ」の強さと相関する活動が前頭連合野の複数の領域で観察されることなどが報告され、前頭連合野の外側部がメタ認知機能に関わっていることが明らかになってきた。

メタ認知機能と前頭連合野の関係は明らかになったが、メタ認知機能に関わる前頭連合野の神経基盤は明らかではない。メタ認知機能の神経基盤の解明には動物を用いた研究が不可欠である。しかし、この機能の解明には言語による内観報告以外に方法がないことから、メタ認知の研究は言語によるコミュニケーションが可能な、人でのみ可能であると考えられてきた。しかしながら、最近の比較認知科学研究により、人以外の動物（サルや鳥など）もメタ認知能力を示すことが明らかになっている。

動物を用いた研究では、難易度の高いテストが時々現れる記憶課題を動物に行わせる。従来の行動課題では、難易度の高低にかかわらずすべてのテストを動物に受けさせる。しかし、今回の課題では、テストを受けるか、テストを回避するかを、動物自身が選択できるようにする。そ

して、「テストを受ける」を選択して正解した場合は好物の報酬をたくさん与えるが、間違った場合は報酬を与えず、次の試行開始までの待ち時間を長くする。一方、「テスト回避」を選択した場合は、少量の報酬を30～50%の確率で与える。

このような課題を動物に行わせた場合、もし動物がメタ認知能力をもっているとすると、難易度が高くなると「テスト回避」の選択が増加すると予想される。また、「テスト回避」の選択肢を入れない強制テスト条件での正答率と、「テスト回避」の選択肢を入れた自由選択条件での正答率とを比較すると、自由選択条件での正答率が高くなると予想される。

眼球運動を利用した選択条件つき遅延位置合わせ課題を4頭のニホンザルに学習させ、「テスト回避」条件を含む自由選択条件とそれを含まない強制選択条件での正答率と、「テスト回避」選択率を、課題の難易度を変えて検討した(図1)。その結果、3頭のサルが、メタ認知能力をもっていると予想される上記の2点をクリアした。この結果は、ヒト以外のサルや鳥などもメタ認知能力を示すという先行研究の結果を支持すると同時に、この課題を行っているサルを用いることにより、メタ認知機能に関わる神経基盤を明らかにする研究が可能になることを示している。そこで、メタ認知機能と前頭連合野の関係をもとに、これらの動物を用いてメタ認知機能に関わる前頭連合野の神経基盤を明らかにしていこうと考えている。

こころをめぐる思想と技法——日本宗教史の事例から

鎌田東二

本報告では日本の宗教思想史における「こころ」についての思想と技

表1 各時代のこころ観思想と技法

1	古代	神話の時代	神道の時代(神話・詩歌)	祭祀・供養・修行
2	中世	宗教の時代	仏教の時代(戦乱・怨霊)	信心・芸能(平家物語・能)
3	近世	学問の時代	儒教の時代	修養・作法
4	近代	科学技術の時代	「西洋教(洋学)」の時代	技能

表2 神楽・申楽(能)と歌舞伎の違い

1	古代	神楽	祭りの場	仮面使用	神人一体(神懸り・神に成る)
2	中世	申楽(能)	野外・能舞台	仮面使用	神人複合(神・霊の化現・化身)
3	近世	歌舞伎	歌舞伎舞台	限取り	人間世界(市井の人情)

法(ワザ)を通史的に捉える。その際、作業仮設的に以下の時代区分と時代特性の大局図に基づきながら、神懸り・神道・Shamanismの系と止観・仏教・Meditationの系の両軸を立て、そこから各時代のこころ観思想とこころを切り替えたり、深めたり、鎮めたりする技法(ワザ)の表出を跡づけ、その特質や独自性を引き出す試論を提示する(表1)。

1 古代の心観とワザ——律令体制下における一定の平和・平穏・秩序が実現した時代

神懸り・神道・シャーマニズムの系においては、「神懸り・俳優・神楽・鎮魂」のワザ(ワザヲギ)による「たましい」の賦活、つまり、生命力の蘇生が目指され、それはアメノウズメノミコトによる天の岩戸の前での神懸りの神話に表出された。また、歌によるこころの浄めが、スサノヲノミコトによるヤマタノオロチ退治の後の歌の表出「八雲立つ出雲八重垣妻籠みに 八重垣作るその八重垣を」として表現された。ワザヲギは「たましい」を賦活し、歌は「こころ」を鎮める。

そもそも仏教は心の制御練成法であったが、その技法(心のワザ学)とは止観・瞑想による「心」の制御にはかならなかった。聖徳太子は憲法十七条の中で、「厚く三宝(仏法僧)を敬へ」と説き、嫉妬や憤怒の「心」を抑え、超えよと諭した。神懸り・神道・シャーマニズムの系だけでは、「心」の制御と国の治まりが覚束ないと思念し、仏教を「万国

の極宗」と讃えた。その聖徳太子の理念を深化・実現させたのが最澄だった。最澄は、『天台小止観』『摩訶止観』の瞑想法に基づいて、『山家学生式』を定めた。最澄は比叡山に日本天台宗を開き、止観業(法華・禅)と遮那業(密教)の2つの瞑想のワザを置いた。『山家学生式』は、「道心」を求め持つ者こそ「国宝」とする、国宝養成機関の宣言書だった。そして、天台12年の籠山行の中から「千日回峰行」という独自の天台行が生まれた。それは、自然の息吹に身を浸しながら生身の不動明王と成るという究極の天台密教的行(ワザ)であった。それに対して、真言宗を開いた空海は、「三密加持」のワザによる「即身成仏」の道を説いた。それはまた、10の段階の心を如実に知り(如実知自心)、最高の段階の秘密曼荼羅莊嚴心(大日如来の心)に帰入し合一していくワザであった。このような台密(天台密教)や東密(真言密教)の行法(ワザ)の中から修験道的な滝行も始まる。滝行は裸形上人や花山院法皇や文覚上人らによって始まり完成したとされる。

2 中世の心観とワザ——戦乱時のこころとワザ(乱世における二重権力構造)

「乱世=武者の世」としての「中世」は、保元の乱(1156年)・平治の乱(1159年)より始まる。そこにおいて、「死」と「史」と「詩」が連鎖した。末法の乱世における戦乱などによる「死」を見つめる心から「史

(歴史観)」が構成され(慈円『愚管抄』、北畠親房『神皇正統記』、『平家物語』などの「詩」(琵琶語り文芸)が生まれた。乱れた世であればこそ、「正」を、「真」を、「根源(根元)」を希求した。その根源神話としての中世神話を完成させたのが、吉田兼俱の「大元宮」の創建と『唯一神道名法要集』の著作であった。この中世に、可視化と不可視化、リアリズム(写実主義)とミスティシズム(神秘主義)、武力(軍事力)と呪力(霊力)の両極化が進む。一方で、慶派(運慶、快慶など)の写実主義が花開き、他方、「秘すれば花」を説いた世阿弥(『風姿花伝』)や「隠幽教」を説いた吉田兼俱(『唯一神道名法要集』)の神秘主義が隆盛した。後者は、「秘する」「隠す」ことを美学・哲学・技法にまで高めた。

末法(1052年～)の世の「死」を目前とした救いは、自力の行ではなく、絶対他力の「信心」に向かい、その「信心」のありようを法然、親鸞、一遍らが「称名念仏」「踊念仏」として説いた。中世の乱れた心をつなぎとめる仏教のワザは、死を前にして一瞬で一言で言い切ることでできる言葉、「念仏(南無阿弥陀仏)」や「題目(南無妙法蓮華経)」であった。只管打坐、専修念仏、法華一乗など、一言化、断言化、専修化が進んだ。

3 近世の心観とワザ——統制された平和時のこころとワザ(幕藩体制および鎖国の確立)

統制された平和時の中での遊楽・遊興・娯楽・エンターテインメント化が進む。神楽・申楽(能)と歌舞伎の違いは、神事性の喪失と遊楽化であり、より人間世間化した市井の人情世界が描かれた。歌舞伎の舞台では、能舞台に見られた「橋掛かり」は消え、観客席から出てくる「花道」が現れた(表2)。

俳諧・吟行などの遊楽性が進み、石田梅岩の石門心学など民衆の修養道徳化も進む一方、『万葉集』の研

究から『源氏物語』『古事記』などの古典解説に至る国学（古学）の確立を見、「からごころ（漢意）」の排除と「やまとごころ（大和心）・やまとことば（大和言葉）」の探究が起こった。その精神は、本居宣長の「敷島の和心を人間はば 朝日に匂ふ山桜花」によく表れている。

寺社奉行の監視と管理の檀家制度の元での儀礼仏教化と庶民仏教化が進み、寺子屋が設けられた。白隠は「気海丹田の法」という内観法を実修した。

4 近代の心観とワザ——戦乱時のこころとワザ(文明開化と対外戦争)

神仏分離令の施行により廃仏毀釈が起こり、神仏関係に激変が起こった。神道の再編と国家管理化が進み、伝統的な加持祈禱・禁厭が禁止される一方で、西欧から伝来した心霊研究、スピリチュアリズム、オカルティズムの刺激を受けつつ、大本教の出口王仁三郎が神道系シャーマニズムの伝統を「鎮魂帰神法」として再編し、個々の「内部生命」および「霊性」の探究として行法化した。また、南方熊楠による真言密教の生命思想化（生態学化）、夏目漱石や鈴木大拙や西田幾多郎の参禅体験に基づく「純粹意識・主客未分・無差別・即非」の思想言語化、スウェーデンボルグ思想やW.ジェイムズの心理学、東京帝国大学心理学助教授福来友吉の「千里眼・念写」実験、宮沢賢治の「或る心理学的仕事」としての「心象スケッチ」など、西洋思想とのぶつかり合いの中で日本のこころ観とワザ学が揺らぎ、再編された。

5 現代の心観とワザ——平和時代が混乱期のこころとワザ

「となりのトトロ」から「千と千尋の神隠し」への変移に戦後の風景と心の変化が象徴される一方、アニメズム、シャーマニズム、精神世界、身体技法、エコロジー、パワー・スポーツへと関心は拡散遷移し、オウム真理教事件（1995年）でこころ

とワザの荒廃が顕著に表れた。

「こころ観」領域 指定討論

研究報告への問いかけ

島菌進

2つの報告はこころの未来研究の科学的アプローチと人文学的アプローチの両極を代表するが、「メタ」と「ワザ」に焦点を当てた研究と見なして問いかけてみたい。

船橋氏のメタ認知機能研究は、こころの働きを厳密な実証科学の方法で捉える最先端の試みだろう。1次的な認知や記憶のレベルと2次的な「メタ」のレベルとを区別し、後者の機能が脳科学的所見とどう対応するかを調べるものだ。以下、科学的方法に疎い者の問いである。

こころの「メタ」的な機能は複雑なこころの働きに広く見られるものだが、ここでメタ認知やメタ記憶と概念化されるものが、こころの複雑な働きの全体の中でどのような位置を占めるのか、その見通しについて教えていただきたい。また、基礎科学として洗練されているだけに市民の日常生活との関連が見定めにくい研究なので、この研究は「こころの未来」にとってどのようなインプリケーションがあるのかについてお尋ねしたい。

次に鎌田氏の多彩な素材を取り上げた報告だが、初期の『神界のフィールドワーク』（1987）と近作の『神と仏の出逢う国』（2009）の双方を参照するとその意義が理解しやすくなる。前者では超越領域への越境の経験の種々相が取り上げられ、後者では日本宗教史の全体を見通す見取り図の作成が試みられている。そこにさらに「ワザ」とこころという問題を結びつけると今回のワザの日本思想文化史となる。

質問だが、まずこれらのワザがそのような共同性において育てられる

のか。「共同性のワザ」というものも考える必要はないだろうか。また、達人の宗教性と凡人の宗教性とのかわりについて、日本の特性をどう理解すればよいだろうか。さらに、からだにかかわるワザと精神的価値との関係をどう考えればよいのだろうか。これらの問いから、「こころの未来」の一端が垣間見えるだろう。

コメント——唯身論の立場から

菅原和孝

この研究会を特徴づけるメタ主題は「自然主義 vs. 解釈学の緊張関係」である。サルを対象とした脳神経科学の実験によって「メタ記憶」の機構を解明する船橋新太郎氏の研究は、世界認識を物質過程の法則性によって基礎づけることを志向する。いっぽう、古代から近・現代に至る日本人の「こころ」観の系譜を辿る鎌田東二氏の研究は、民衆の心性を図像をも含む広義の「言説」の分析によって照らし出す。両者のアプローチは水と油のごとく交わりえないかにみえる。だが、それらが志向する世界認識には共通性がある。それは、人間は表象を媒介として世界と関わりあうという前提である。大森荘蔵によれば、「表象主義」は認識を根本から制約する桎梏である。私が標榜する「唯身論」(corporealism)にとってそれはもっとも手強い仮敵である(拙著『ことばと身体』参照)。

表象主義を乗り越える道すじを示すことは、現時点ではできない。もっとも重要だと思える論点を示すにとどめる。

(1) 言語能力をもつ人間は経験を出来事として分節化する。だが、出来事の開始と終了を一義的に定めることはできないから、「出来事の集合」は非可算的である。外延を定められない対象にいかにか肉薄するの

か。これが脳神経科学のもっとも困難な課題であろう。

(2) 超越者と感応する日本人の心性へ適行しようとする知識人の認識を圧倒するもっとも根源的な生の事実は、極限的な貧しさのなかで身を粉にして働く民衆の善良さにほかならない。認識はこの善良さに届きうるか／それと釣りあいうるか。

(3) 宗教学・宗教人類学に固有の脆弱さは、その研究対象たる「不可視の作動主」(invisible agent)の存在論的な身分の曖昧さに由来する。その様態を了解しようとする知の運動は、不可避免的に、その実在を「信じる人」と「信じない人」とのあいだに設定される境界を増強し続ける。ゆえに、不可視の作動主をめぐる問いは、境界一般に関するより高次の問いに巻きこまれざるをえない。

「現代の生き方」領域 研究報告

新人看護師のストレス予防とSOC改善調査

カール・ベッカー

看護師の置かれている厳しい現状

人口の高齢化に伴い、疾病構造は複雑化し、高度な医療技術と質の高い看護へのニーズも高まってきた。これに伴い看護師の仕事は複雑化・多様化しているにもかかわらず、労働条件の厳しさや人員不足は一向に改善されない状況が続いている。

看護師の仕事は、患者ケアの難しさや職場内の対人関係、不規則な勤務体制、過重労働などのストレス因子を内包している。さらに仕事の量が増え、仕事の目的が明確でなかったり、責任の及ぶ範囲が不鮮明なため、役割が曖昧であることもストレスが増す原因と指摘されている。アメリカでは1970年代から、看護師の仕事上の特徴的なストレスに関する研究が盛んに行われた。

その中でも、慢性的な対人的ストレスに由来する心身の疲弊と感情の枯渇を主徴とする症候群として、バーンアウトが注目されるようになった。バーンアウトは、看護師の健康上の問題であるだけでなく、患者ケ

アの質を低下させると考えられ、研究が進められた。1980年代には多くの研究者により、バーンアウトの原因、ストレスの認知の仕方とコーピング、個人的要因・職場環境など、基礎的研究が多角的に取り組まれた。これらの結果をもとに、働きやすい職場環境作り、卒後教育の見直し、メンタルサポート体制の完備、リエゾンナースの配置、ストレスマネジメントの奨励、セルフケア教育の開催などの対応策や予防策が講じられた。しかしながら、抜本的な解決に導く手立ては見出せていないのが現状である。

バーンアウト予防に何が有効か

看護師が置かれている厳しい現状を打開する上で、本研究が着目しているのがアントノフスキーのSOC = Sense of Coherenceである。SOCは3つの感覚にわけられる。第1は、把握可能感 = 自分の置かれている状況が予測できるという感覚。第2は、処理可能感 = 何とかやっつけていけるという感覚。そして、第3は、有意味感 = 日々の営みにやりがいや意味を感じられるという感覚である(山崎、2008)。こうした感覚をバランスよく持つ者は、ストレスが強くなる状況下にあっても、うまく対処することができるといえる。

バーンアウトはストレスに由来する現象であるが、受け手によってそのストレスの性質と感ずる程度は違う。これまでに、SOCが高い

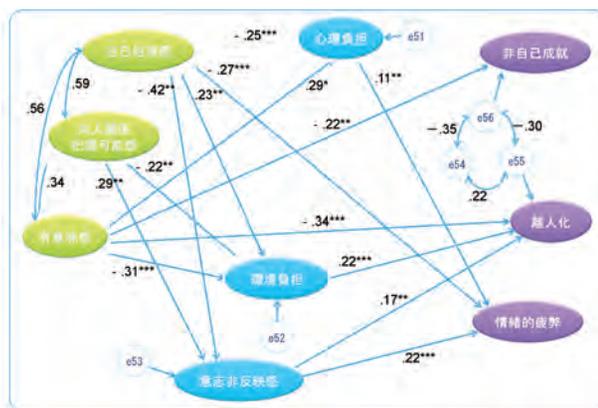


図2 SOC、ストレス、バーンアウトの関係

看護師ほどバーンアウトをおこしにくいことが報告されている (Baker, 1997; Tselebis, 2001; 岩谷・渡邊・國方, 2008)。看護職に就いて10年間で、SOCが形成される時期であり、看護職の経験そのものがSOCを大きく変化させる可能性も持っている (Antonovsky, 1987/2001; 坂野, 2009)。

そこで本研究では、ストレスコーピングの個人要因と、看護師のSOC形成においても重要である1年目に着目し、①SOCとストレス、②SOCとバーンアウト、③ストレスとバーンアウトの関係を証明することを目的とした。

プロジェクトの進行状況

本調査では、承諾をくださった近畿地区の病院に質問紙を郵送し、研修の場を利用し、新人看護師への配布と回収を各担当者に行っていた。第1回目の調査結果では、協力病院は125施設で有効回答は1330名分(男性1割、女性9割、平均年齢は24歳)であった。最尤法・Promax回転による因子分析を行い、既存研究とは若干違う因子構成を抽出した。まだ分析中であるが、SOCとバーンアウト、ストレスの関係について報告する。

図2は、本調査第1回目のデータを分析したものである。従来の研究により、過度なストレスがバーンアウトに及ぶとされており、本研究でもストレス自体がバーンアウトに影響

響を及ぼすことが追認された。しかし注目すべきは、SOCとバーンアウトの関係である。SOCの自己処理感＝自分の置かれている状況をよく理解・把握し、今後の見通しがきく人ほど、仕事による精神的な疲労を感じない。また、SOCの有意味感＝生活や行動に価値を見出し、意義を感じる人ほど、自分の能力が仕事に反映され、達成感を感じ、患者に優しい看護を行っていることが分かった。先行研究と同様、ストレス自体がバーンアウトに影響を与えてはいるが、SOCの方がより強い影響を与えており、個人が持つストレスコーピングであるSOCがバーンアウトの予防に有用であると示唆された。

本調査はまだ資料収集中である。今後は1年を通したSOC、ストレス、バーンアウトの変化とその要因を詳しく検討していきたい。SOCの形成期でもある新人看護師に追跡調査を行い、ストレスや職場環境がSOCに与える影響を考えることで、バーンアウト予防に役立つことを期待している。

現代日本の若者における社会的適応

内田由紀子

筆者は文化心理学を専門として、人の感情経験や対人関係と、社会・文化的構造との関わりを探求する比較文化研究を行ってきた。文化心理学研究では、アメリカでは個人の内部にある「主体」が自己の行為の源泉であり、「個人」として社会関係を構築するような人間のモデルである「相互独立的自己観」が優勢であることが示されてきた。これに対して日本社会では、対人関係などの場が第一義的存在であり、人はその中で他者と関わり合いながら自己を相対的な存在として定義づけていくという「相互協調的自己観」が優勢で

あることが示されてきた。

しかし現在の日本の社会の若者においては、必ずしも相互協調的なだけではない価値観が定着しつつあるともいえる。たとえば文化心理学者の北山忍氏は、近年の日本においては他者との関係性を否定し、自分の利益を利己的に追求しようとする自己認識が意識的レ

ベルで取り入れられようとしていることに言及し、これが西洋の個人主義とは異なる、関係の呪縛からの解放を意味する「コジンシュギ」であることを指摘している（『このころの未来』創刊号 p46-47）。

日本においては雇用システムの変化と流動性の高まり、さらにはグローバル化の影響ならびに西洋的な価値観へのある種の「あこがれ」から、自己責任、能力評価などの個人主義的概念が積極的に（特にビジネスの世界で）取り入れられてきた。これは北山の指摘するように、関係からの解放でもあり、そしてその帰結として関係性からの栄養源を断ち切り、相互協調的に定位される「自分」のよりどころとする場を失うことでもあった。

このようなグローバル化の影響は、特に文化内で中心的振る舞いをしている人たちよりも、「周辺の振る舞い」をしている人においてより顕著であろうと考えられる。

センターのプロジェクトでは、日本のニートやひきこもりに焦点をあてて研究を行っている。内閣府の調査では20代～30代の若者の70万人がひきこもり状態にあると推測され、長い場合にはひきこもり期間は実に10年以上と、大きな家族・社会問題の1つになっている。われわれの研究では、ニート・ひきこもりに共通する心理特性を同定し、カテゴリーではなくスペクトラムとして

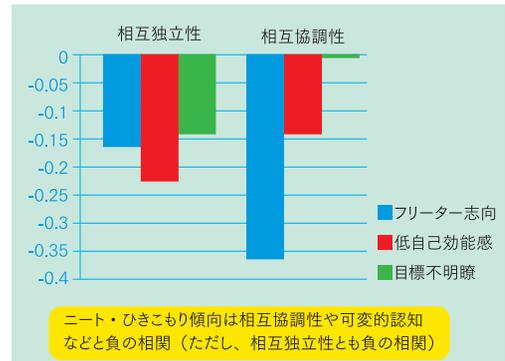


図3 ニート・ひきこもり尺度との相関

ニート・ひきこもり傾向をとらえた際に、若者のこのころの問題の一端に迫ることができるのではないかと考えた。

1つの成果は、ニート・ひきこもり傾向の要因を同定し、その要因についての個人差を測定する尺度を開発したことである。ニートやひきこもりにまつわる調査研究からいくつもの行動・心理傾向をピックアップし、学生や実際のひきこもりの人たちを対象に調査を行ったところ、3つの因子が見られることがわかった。1つはフリーター生活志向性であり、「職場や仕事で我慢できないことがあれば無理せずにやめた方がいいと思う」といったような態度である。2つめは自己効能感の低さであり、「コミュニケーションをとるのが難しい」といったような自信のなさを表す。3つめは将来に対する目標の不明瞭さで、「将来何をしたらよいかかわからない」という要素である。このような3つの因子により構成される27項目のニート・ひきこもり尺度、ならびに相互協調性・相互独立性について、大学生、NPOで支援を受けているひきこもり、そしてウェブ調査で全国のニート状態にある人たちを対象とした大規模な調査を行った（図3）。

興味深いことに、ニート・ひきこもり傾向は、相互独立性、相互協調性のいずれも負の相関を持っていた。つまり、ニート・ひきこもり傾向が高いほど、相互独立性も相互協

調性も否定するような傾向にあるということである。日本的な対人関係を断ち切ろうとしているが、アメリカ的な個人主義が実現されているわけでもないという、北山の指摘と一致した結果といえる。

大学生を対象とした実験研究では、ニート・ひきこもり傾向が高い学生ではある課題に失敗した後に、同じ課題に対して努力をしなくなる事が示された。ニート・ひきこもり傾向の低い学生では、むしろ失敗した後に成功した後よりも努力しようとする傾向があることとは対照的であった。

経済状況などマクロなレベルでの社会構造が変化すれば、それともない家族や職場のあり方も変化し、そこで生きる人々のこころも変化する。文化の周辺と考えられているニート・ひきこもりの要因となるようなフリーター志向、自信のなさ、不明確な目標や非努力主義的な心理傾向を持つ人は、現時点の日本社会においては居場所を見つけられずに「こもる」というスタンダードとは異なる行動傾向を示しているのかもしれないが、今後、社会構造の変化がさらに現在の方向に進むのか、それとも元に戻るような反作用的力が働いていくのかによって、彼らの行動のあり様も変化するだろう。他者や社会と再度「つながる」認知の枠組みを検証し、ひきこもりの理解ならびにネガティブな状況への耐性作りなどの支援と運動させていきたい。

発達障害からみた現代の意識

河合俊雄

この研究報告は、河合の関わっているプロジェクトを横断的に合わせて、「現代の生き方」について検討しようというもので、発達障害の増加ということから、現代の意識・生

き方について考察する。その際に、発達障害において「同一態保持」や収集癖などの物へのこだわりも認められるので、「物への依存・人への依存」というテーマも関わってくる。

1.方法論として、これは症状、病理から現代の意識を分析しようというもので、極端から本質をつかもうとしている。また一般人に対する調査などによって、「中心の特徴」をつかもうというのではなく、「周辺の特徴」から研究していこうという方法論である。

2.問題意識としては、現代の日本における意識が変化してきているのではないか、という心理療法での実感から生まれてきている。たとえば村上春樹も、近代小説が近代的自我の独立に向けてきたのに対して、「現代の人の在り方というのは、それと大きく違ってきている」ことを指摘している（『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです』）。

3.その場合に、明治以降の日本は、近代意識の確立を目指してきたと考えられるので、近代意識の特徴をおさえておく必要がある。近代意識というのは主体を持つことで、前近代の家族、共同体、自然、死者に包まれた在り方からの解放によってヨーロッパに成立してきたものである。そのパラダイム的な特徴はデカルトのコギト、遠近法、宗教改革によって示すことができる。そして成立した主体は自分が自分をみるように、自己関係や自己意識を持ち、内面を持つことを特徴にしている。

4.近代意識は自己意識であって、自己意識は心理療法の前提となっている。また心理療法は主体的に訪れ、主体的に問題・症状を解決するもので、鏡としてのセラピストは自己関係を促進する。しかし自己意識は自己分裂・矛盾を生み、神経症症状を生み出す。劣等感、罪悪感、自己愛、自我肥大、不安などがその例である。日本人に特有な神経症は対

人恐怖で、主体が共同体から自立してくるに従って、不安を感じることに理解できる。

5.近年、学生相談などで顕著に認められるように、対人恐怖が減少して発達障害が増加している。発達障害は、L・カナーとH・アスペルガーが独立して提唱した自閉症を中核として、L・ウィングが言う「自閉症スペクトラム」という広がりを持っている。母子関係論から器質障害、認知的問題にシフトしてきたこともあって、療育と訓練が中心になっている。日本における発達障害概念は、軽度（ADHDなど）も含めていて、生徒の6.3%が発達障害であるという調査もある（文科省、2002）。

6.一般的に、発達障害への心理療法は有効でないとされているけれども、それは、発達障害においては、前提とされる主体がないことに起因していて、主体の立ち現れるアプローチを行っていくと、可能であると思われる（河合、2010）。

主体のなさが極端になると言語、他者がいないという自閉性障害にまで至る。同一態の保持、特定の物の収集は、決まった行動や物が主体の代わりになっている。主体ができてくると、物へのこだわりが捨てられることがある。主体のなさは境界のなさとしても現れて、身体・相手との境界のなさ、排泄物、血、皮膚への興味、親をはじめとする対人関係での分離のなさなどが特徴的である。したがって、分離が治療的に必要で、「結合と分離」を通じて主体や関係が心理療法で形成されることがある。境界のなさは、言語の機能しなさや、象徴性のなさ、直接性などとしても現れてくる。

7.発達障害における偽の自意識を畑中千紘研究員の事例によって検討（省略）。

8.発達障害の特徴から現代の意識を検討してみると、消費社会、メディア、保険などのシステムに真の主

体性はあるのだろうか。また境界のなさも現代の特徴で、携帯・ネットで常につながっている状態になる。また若者の文化でも、化粧など極端に外面、表面にこだわり、内面が喪失されてきている。自己関係がなく、直接的であることも多い。

そうすると、発達障害に見られるような主体性のなさは、現代の意識の特徴としても当てはまる。対人恐怖では主体確立をめぐる葛藤があったのが、発達障害では主体のなさが目立っている。しかしそれは、現代の生き方として、主体の確立が要請されるからではないかとも考えられる。家族、社会での役割が不明確になり、各自の主体性が求められるからこそ、主体のなさが剥き出しになる場合が増えていると考えられる。

文献：河合俊雄（編）（2010）『発達障害への心理療法的アプローチ』創元社

「現代の生き方」領域 指定討論

研究報告への問いかけ

島蘭進

ベッカー氏の報告は、ケア従事者のこころの健康を測定するSOC概念を日本に応用する貴重な試みだ。以下、質問だが、まずQOLと同様に質的なものを量的に評価するという困難をはらんでいないか。バーンアウトは環境要因が大きいと思うが、それについてはあまり問わずに心理的要因に焦点を合わせることに問題がないだろうか。この尺度は自己肯定的な考え方・感じ方をよしとする内容を含むが、それは批判的に問いかける能力とどう関係するのだろうか。最後に、西洋で構築されたモデルを日本に適用する際の問題点がないだろうか。

次に内田氏の報告はこころの社会・文化心理学の洗練を印象づける報告だが、次のような問いが浮かぶ。調査の際の質問項目から比較のため

の概念構成へと展開する際に、どのような配慮が必要だろうか。アメリカ文化や日本文化の多様性を組み込んだ上での一般論を構成する手順はどのようなものだろうか。以上は、日本文化論・日本人論に対する批判が積み重ねて来たことをどう調査研究に組み込むかという問いにかかわる。さらに、ニートやひきこもりという現象が生じてくる理由と「関係」志向という特徴をどう関係づければよいのだろうか。

最後に、河合氏の報告は個別の事例から兆候を読みとり、知識を集積していくというやり方で、人文学の方法に近く、評者には理解しやすいものだ。内田氏の報告ともかかわるが、すでに1950年に刊行された『孤独な群衆』でD.リースマンは内部指向型人間から他人指向型人間への転換を報告していた。主体的人間という近代的理想に対して主体の境界が薄れていく傾向が長期にわたって進行しているが、それと発達障害の関係はどうか。河合氏はその泥沼化を越えるころの機能として「自己関係」という概念を提示しているが、それはどのような意味なのか。また、こころの病理の診断や治療と社会病理の診断・治療とはどうかかわっているのだろうか。

こころの未来研究センターの研究報告会2010に参加して

高橋英彦

この度、こころの未来研究センターの研究報告会2010に午後から参加させていただいた。午前中はあいにく別の会に参加せねばならず、午後からのみの参加となってしまう、ご容赦いただきたい。

ベッカー先生の看護師のバーンアウトについてのお話は、そのまま研修医や新社会人全般にいえること、sense of coherenceの話は目から鱗であった。われわれ精神科

医が臨床の場面でも患者の sense of coherenceをどうとらえるかは重要なテーマであると痛感した。

内田先生は individualism という米国流の価値観が流布しているようにも思える現代日本において、実は日本の風土の中で育まれてきた「コジンシュギ」は米国の individualism とは似て非なるものという話をされた。Valueの基準が変わっても、それを受け止めるころの物差しが対応しきれておらず、happinessに結びついていないのであろう。社会精神医学という分野や脳科学的にも示唆に富む発表であった。

河合先生の話は発達障害の心理療法に関するもので、self-consciousnessの重要性や鏡としてのセラピストということが印象的であった。われわれも脳科学的に self-consciousnessの問題にアプローチしたり、鏡でこころの中をみるように自分のあるころの状態を脳画像という形でfeedbackする方法を検討している。私は生物学的にこころの機能や病態を探ろうとしている立場ではあるが、まわりの多くの研究者もころがある脳の部位、ある分子、あるモデルで単純に記述できるものではないとは認識しているはずである。しかし、私は楽観的に考えるようにしており、心理的、生物学的アプローチ、実は両者は同じようなものを見ていた、行っていたと将来なればよいなと考えている。

島蘭進先生は、父上が私の精神科医としての恩師の恩師の恩師に当たるような方で、島蘭進先生には今まで何度かお目にかかったことはあったが、こうして身近に指定討論させていただき、大変、感慨深いものがあった。

最後にこのような刺激的な場を提供していただいた吉川センター長はじめ、こころの未来研究センターの先生方に厚く御礼申し上げます。